
とある冬の日

紅月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある冬の日

【Nコード】

N5451J

【作者名】

紅月夜

【あらすじ】

日番谷とやちる、一護と乱菊
出会って始まるのは？

護廷十番隊副隊長松本乱菊は、誰も座っていない隊首席をみて、自分の席を立った。

「うーん、今日は寒いわねえ。

こゝんな寒い日は……………」

「何処行きやがったあの野郎!!!!」

総隊長に呼ばれ、用を済ませて帰ってくると、一人残って仕事をしている筈の松本が居なくなっていた。
代わりに……………」

「あ、ひつつー、おかえり!!」

「それで何で、てめえがここにいる!?!」

草鹿やちるが隊首席に座っていた。

「あのねー、ひつつーに頼みたいことがあって来たの!」

「は?」

少々悪い予感がしつつも、頼みの内容を聞かないで断る訳にもいかず、ただ聞き返した。

「あのねー、雪を降らして欲しいの!!」

それでね、積もらして欲しいの!!」

目をキラキラとさせて、顔をにこにこさせてお願いしているやちるの様子は非常に微笑ましいが、頼まれている側の日番谷にしてはうっとうしい以外の何物でもなく、ただ一言。

「断る。何でわざわざ俺がそんなことしなきゃならないんだ」

しかし、断られたからといって諦めるやちるではなく、日番谷は更

にしつこくせまられることになった。

「ひつつし、雪ー！！雪降らせて！！

雪降らせてってば！！ねえ！

はーやーくー、降らせてってばあー！！」

ぷくぷくと頬を膨らませて、日番谷の袖を引っ張る姿は、戦闘部隊である十一番隊の副隊長とは思えないぐらいに可愛らしい。

しかし、そんなことで揺らぐ日番谷ではない。

「理由を言え、理由を。」

正当な理由があるなら考えてやる」

やちるは、きよんとした顔で日番谷を見て、にこやかに言い放った。

「理由なんて無いよ！！」

「乱菊さん、乱菊さん。」

何で俺までこんなところにいるんですか？」

「あらい護、あんたこんな一杯の荷物抱えた女を一人でほっとくっていうの？」

ひどい男ねえと続ける乱菊に、ひどいのはあんただよ一護は突っ込みかけて、やめた。

そのかわり、数時間程前のことを思い出して、ため息を一つ、こっそりをついた。

「一護！ちよつと付き合って！！」

「……は？」

一護が自分の部屋で勉強をしていると、乱菊が鍵がかかっている筈の窓を開けて言った。

「え？…何で乱菊さん？ってか、鍵……」

一護が指さしたところには、曲がっているが、ネジ一本でかろうじてついている鍵があった。

「ん？……ああ、ご免、ご免」

乱菊は壊れた鍵を見て、悪びれずにそう言うと、一護をひつつかで窓から出ようとした。

「ちょっ、乱菊さん！？どこ行くんすか！？ってか鍵！！」

一護は慌てて窓に掴まって抵抗すると、乱菊が振り返った。

「もうー、がたがたうるっさいわよ一護！！鍵は謝ったからいいでしょ！時間が無いのよ！！」

窓から半分程体が出た状態で、急に手を離されてしまったため、一護は腹筋の力だけで体のバランスをとる羽目になった。

「せっ、せめ、て、い、行き、先、ぐらい。あと、かつ、体、起こして！」

「行き先も何も買い物に行くに決まってるでしょ！隊長が居ない内に全部済ませないと！」

さあ、買い込むわよと、うきうきしている乱菊に、一護は何と声をかけていいのかわからず、一人でひたすら腹筋と腰と窓枠にのっているお尻の痛みに堪えることになった。

数分後、漸く一護の様子に気づいた乱菊に救出されて、買い物に行き、今に至る。

「あら、雪」

尸魂界に着くと、現世では降っていなかった雪が降っていた。

「うお、冷て」

着ているものといえは死覇装のみなので、首筋等が露出していて非常に寒い。

乱菊は何処からともなくマフラーを出してきて、自分の首にまいた。
「乱菊さん、俺のぶんは？」

「あるわけないでしょ。男の子なんだからちよつとは我慢しなさいよ。ほら、早く隊舎に行くわよ！」

乱菊は一護を急ぎ立て、十番隊に駆け込んだ。

「わあ！！雪だー！！ありがと、ひつつー！！」

やちるの雪を降らせて欲しいという願いに対し、理由を問うた日番谷だが、理由等無いと満面の笑みで返され、唾然としてみると、いつの間に登ったのか、日番谷はやちるを肩車して、尚且つ頭をべしべし叩かれるという、日番谷にしては屈辱的、やちるにしては楽しい状況に陥った。

日番谷は雪を降らせたらやちるも下りるだろうと思い、仕方なく雪を降らせたが、やちるは未だ日番谷に肩車された状態で楽しげに日番谷の頭を叩いていた。

「おい、草鹿、下りろ」

「きゃはははは！！」

雪が降っているのを見るのが楽しいのか、それとも他の要因か、笑い続けるやちるに、日番谷は声を荒げた。

「下りろ草鹿！」

「ぶはははははははははははははは！！」

やちるとは違う声が聞こえ、慌てて扉のほうを見ると、本来ならこの部屋に居なければならぬ者が、大笑いして立っていた。

「乱菊さん、『ぶははは』って……」

「だって一護！隊長がやちるを肩車して、頭叩かれてるのよ！！ぶっ、あはははは、可笑しいったらありゃしない！！」

笑い転げる己の副官に対し、仕事をさぼられた怒りと、現在笑われている怒りと、まだ自分に乗っているやちるに対する怒りとを混ぜ合わせて、怒鳴り声にして叩きつけた。

「何処行つてやがったあ！！！！松本ー！！！！」

てめえもさっさと下りろお！！！！草鹿っ！！！！」

やちるは振り払うと素直に下りたが、乱菊はまだ笑い転げていた。

「冬獅郎さん、冬獅郎さん、何だか異様に寒いんっすけど……」

「うるせえ黒崎。『日番谷隊長』だ」

地を這うような声音で言われ、部屋の温度も更に下がり、一護はどうしようと思っていると、部屋を走り回っていたやちるが無邪気に一言発した。

「みんなで雪合戦しよう！！」

あまりにも無邪気に、しかも唐突に言われた為、日番谷は毒気を抜かれ、下がり続けていた気温がとまった。

「そ、そうだな、雪も積もってきてるし、雪合戦しようぜ！」

やちるの言葉に最初に同意したのは一護だった。

「良いわね！動いたら暖まるだろうし！」

続いて乱菊が。

日番谷は、期待した目でこちらを見る三人に対し、目を背けた。

「隊長、雪合戦しましょ。良いストレス発散になると思いますよ。

一護に思いつきぶつけたら」

何で俺！？と喚く一護を横目に見ながら、日番谷は嘆息して言った。

「それもそうだな」

「そこは否定してください冬獅郎さん」

その後、一護はやちる、乱菊、日番谷の三人に雪玉の集中砲火を浴び、びしょ濡れになって、更に寒い思いをしたとき。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5451j/>

とある冬の日

2010年10月11日05時22分発行